

群 教 セ	G10 - 01
	平26.254集
	道 徳

# 道徳的判断力を育てる指導の工夫

— 道徳の時間と体験活動との関わりを通して —

特別研修員 内藤 裕之

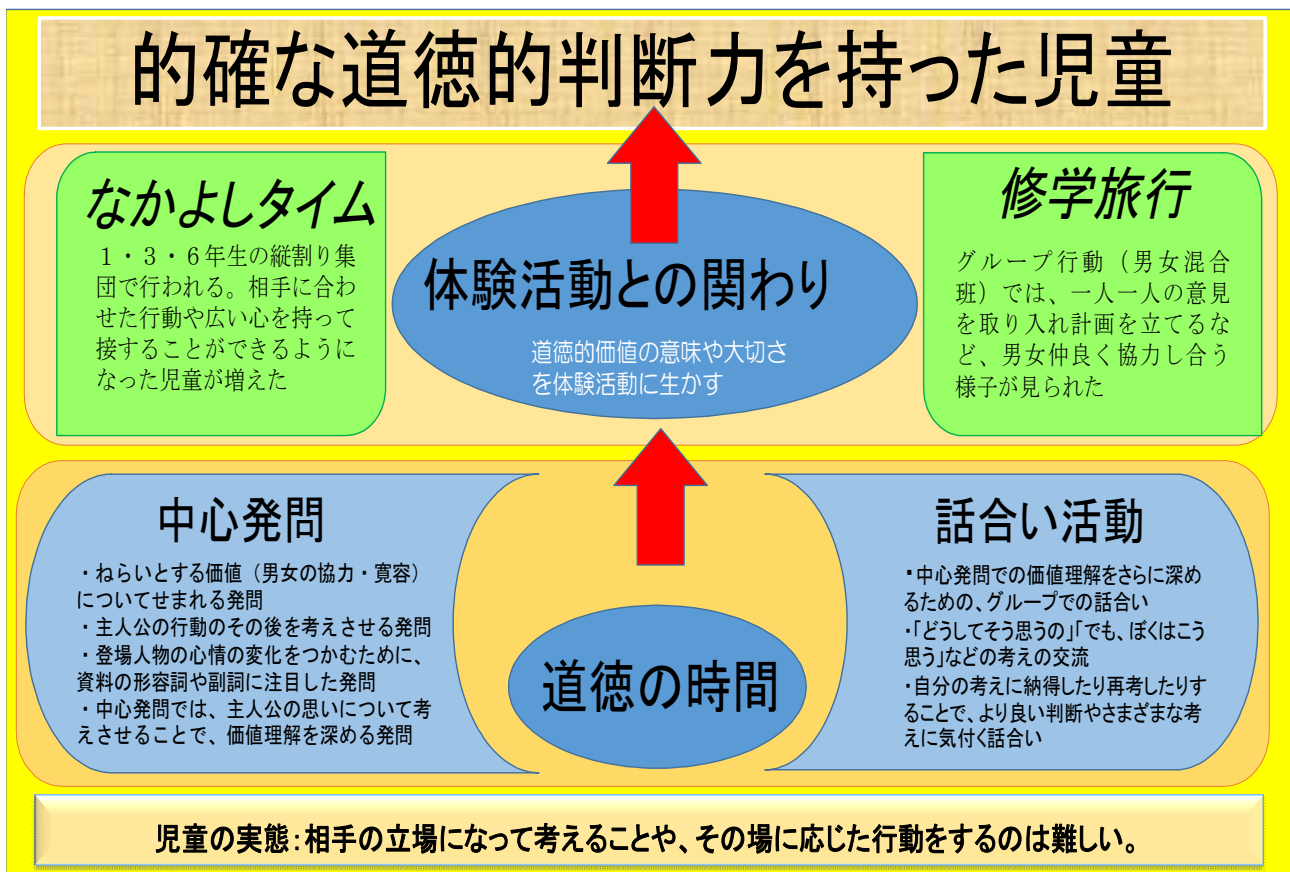
## I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領、道徳教育の目標は、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養う」とある。また、道徳的判断力は「それぞれの場面において善悪を判断する能力であり、的確な道徳的判断力を持つことによってそれぞれの場面において機に応じた道徳的行為が可能になる」とあり、学校における様々な体験活動と道徳教育をつなげることで、指導相互の効果が高められる。

自校の実態として、道徳の時間では、心情を養うことや態度を育てることをねらいとする授業を行ってきた。児童は、価値にせまる正しい発言をしたり、ワークシートに自分の思いを書いたりすることはできる。しかし、生活場面においては、良いと思っても行動に移せなかったり、いけないこととわかっているにもかかわらず行動してしまったりする場面が見られた。そこで、道徳の時間では、発問の工夫をしたり、話し合い活動を充実したりすることで、道徳的価値の意味や大切さを深められることができると考える。様々な場面において発問に対して自分の考えを持つことや、自分の考えを伝えたり友達のいろいろな考えを聞いたりすることが体験活動に生かされ、その場に応じたより良い判断をする力が育つと考え、本主題を設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

### (1)実践1における研究上の手立て

#### ①発問の工夫

- ・中心発問では、主人公の行動のその後を考えさせる。また、その理由を問う。

#### ②中心発問後に、グループでの話し合い活動を取り入れる。

#### ③体験活動（修学旅行）との関わりに生かす。

本時の資料は、「言葉のおくりもの」内容項目の2-(3)は、「男女仲よく協力し助け合う」である。発問の工夫としては、主人公の行動の様子や心情を表す言葉や変化した場面を捉えるようにした。中心発問までに、登場人物たちの状況について補助発問をしながら把握した。中心発問において、話しかける言葉と理由をワークシートに書く活動を行った。これを基に、グループでの話し合い活動を取り入れた。グループでは、一人一人が自分の考えを発表することができた。しかし、発表して終わりになってしまったので、実践2では、以下の手立てを行った。また、修学旅行では、お互いに相手のことを考えた計画をたて、男女のグループで協力しながら活動を行っていた。

### (2)実践2における研究上の手立て

#### ①発問の工夫

- ・補助発問により登場人物の心情の変化をつかむために、資料の形容詞や副詞に注目する。
- ・中心発問では、主人公の思いについて考えさせることで、価値理解を深める。

#### ②中心発問の前に、グループでの話し合い活動を取り入れる。

#### ③体験活動（なかよしタイム）との関わりに生かす。

本時の資料は、「銀のしょく台」内容項目の2-(4)「謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること」である。発問の工夫としては、登場人物の心情を捉えるようにするために「ジャンは体じゅうが震える」「まごまごした様子で、思わず手を伸ばして」などの言葉を取り上げた。

中心発問の前に、話し合い活動を取り入れ意見の交流をすることで、自分と同じような考えであったり、別の考え方だったりすることに気付くことができた。中心発問では、司教の思いについて考えさせた。終末では、授業と自分を重ねながら感想を書くようにしたところ、司教と自分を照らし合わせながら書いている児童が多くみられた。また、なかよしタイムでは、下級生のことを考えて遊ぶ計画を立て、活動を行っていた。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 主人公の行動や心情を表す言葉を捉えて発問したことで、主人公の置かれた状況や立場を把握することができ、ねらいとする道徳的価値に迫ることができた。体験活動では、お互いを思いやった計画を立てることができた。実際の場面では、相手の状況を考えた臨機応変な行動も多く見られた。
- 話し合い活動をグループで行ったことで、一人一人が自分の考えを発表することができた。友達の考えを聞くことで、自分の考えを再考することができ、より良い判断をするための力を高める良い機会となった。

### 2 課題

- 体験活動を見据えて道徳の授業を計画したが、体験活動のふり返りを道徳の授業に生かすなどの工夫をしていく必要がある。

### 3 提言

- 道徳的判断力を育てる指導として、体験活動との関わりにおいて授業を行うことは大切である。だからこそ、道徳の年間指導計画と学校行事との別業を見直し、活用していく必要がある。

## <授業実践>

### 実践 1

- 1 主題名 男女の友情と協力 内容項目 2－(3) (第6学年・1学期)  
資料名 「言葉のおくりもの」東京書籍

### 2 資料及び本時について

すみ子との仲の良いところをたかしに見られ、からかわれたり、周りに言いふらされたりするのを嫌がる一郎は、すみ子をわざと避けようとする。しかし、小さなことにこだわらない明るい性格のすみ子は、たかしのリレーでの失敗を許し、一郎の誕生日には、すばらしい「言葉のおくりもの」をする。

揺れ動くこの時期の男女関係を、明るいすみ子、明るい学級の様子を中心に、現実の問題として描き、児童を引き付ける資料である。

資料「言葉のおくりもの」は、昭和58年の文部省の読み物資料6に掲載されている。30年近くたった今日においても、男女にも友情があることを考えることのできる、色あせることのない資料といえる。

今回の資料において、「すみ子も席を立った」あとに、一郎はすみ子にどんな行動をとるかを考えさせた。そして、その理由を書くことで、自分自身の考えをはっきりと持たせ、さらにグループでの交流をすることによって、友達の考えを聞き、判断する力を高めていきたいと考えた。ねらいにせまるために中心発問をしばり、道徳的価値の自覚を深めた。

### 3 授業の実際

登場人物の3人の顔の絵をはりながら関係を整理した。たかし、すみ子、一郎の態度について聞きながら、板書した。中心発問につながるように、一郎が落とした植木ばちを一緒に片付けた場面やリレーで失敗したたかしをかばい、力づけるすみ子の気持ちについておさえた。資料は、すみ子が一郎に言葉のおくりものをした後、クラスから拍手が起こり、「すみ子も席を立った」で終わっている。この後の一郎の行動を考え、その判断理由を問うことで道徳的価値を自分との関わりで捉えられるようにした。



図1 3人の関係の板書

#### 中心発問

すみ子からの言葉のおくりものあとに、「すみ子も席を立った」とあるが、一郎は、すみ子になんて話しかけるか考えよう。

その後の行動としてすみ子に自分の気持ちを伝えるという考えが多かった。児童のワークシートを見ると、「ありがとう」「ごめんね」「ごめんね、ありがとう」の三通りだった。言葉とその理由については、以下ようになった。

行動(言葉)	理由
ありがとう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きつい言葉を言っても許してくれたから。</li> <li>・たかしに冷やかされても気にしないで声をかけてくれたから。</li> <li>・すみ子さんは、元の学級に戻そうとしているから。</li> <li>・いろいろなことをすみ子さんは、言っていたけど、みんなの力を合わせていくのが一番いいね。</li> </ul>
ごめんね	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そんなに悪気があって言ったんじゃないよ。本当に ごめん。</li> <li>・あんなこと言って自分が後悔しているから。</li> <li>・ぼくは、すみ子さんの気持ちを一つもわかってあげてなかったんだ。</li> <li>・すみ子さんが言っていた学級を作れるようにがんばろうと思った。</li> </ul>



図2 ワークシートに考えを書く児童

ごめんね、 ありがとう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この前は、あんな強い言い方をして叱ったのに、優しい言い方で、やさしい言葉をくれたから。</li> <li>・傷つく言葉を言っちゃったし、植木ばちをこわした時も片付けてくれたから。</li> </ul>
----------------	--

このように、ほとんどの児童は自分の考えをワークシートに書くことができた。このことは、自分の判断基準を持つことにつながったと考える。その後、グループになり、互いの考えを発表し合い話し合い活動を行った。



図3 話し合い活動の様子

S1：「ありがとう」と言うと思う。だって、すみ子は元の学級に戻そうとしているから。

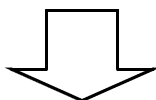
S2：「ごめんね」と言うと思う。あんなことを言って、一郎は後悔していると思うから。

終末 今日授業やみんなの考えを聞いて、これからどんなことに気を付けて生活してけば良いか。

終末の振り返りでは、自分たちのクラスのこととして、書いている児童が多く見られた。

- ・男女だからと言ってひやかしたりするのではなく、女子と男子で協力してお互い嫌な気持ちにもしないように気を付けていきたい。
- ・前向きで何かあったら声をかけたりみんなで協力できたりできるように生活したい。
- ・女子と男子関係なく、仲良く接していくのが良いと思った。また、ひやかすのは良くないと思った。

体験活動との関わり



修学旅行

修学旅行のグループ行動（男女混合班）の計画では、相手のことを思いやる発言が多く見られた。昼食の場所は、好みや値段などみんなの意見を取り入れて決めていた。水族館では、ショーの時間を中心にしたりお土産を買いたいという意見を取り入れて、コースを決めていた。また、遊園地では自分が乗りたいという気持ちだけでなく、全員で乗れる乗り物を考えたり、お互いに、班の友達を待っていたりするなど、男女仲よく協力し合う様子が見られた。



図4 グループでの確認

#### 4 考察

- グループでの話し合い活動を取り入れたことで、一人一人の児童が発表する機会を持つことができた。ワークシートに「発表してくれた人たちみたいに、もっとたくさん自分の考えが書けるようになって、発表できるようにしたい」と書いた児童がいた。このことから、考えを伝えたり聞いたりする活動は効果的であったと考える。しかし、自分の考えの発表にとどまってしまうため、価値を深めるために、話し合う時の視点を示す必要があると感じた。
- 修学旅行を通して、男女関係なく楽しもうという姿が見られ、友達の考えを聞き、受け入れながら行動する児童が増えた。
- 判断力を高めるために、友達の発表を聞いて、自分がどう思ったか、自分の考えに変化があったかを書く活動を取り入れると、さらに、自分の考えを再考しやすくなると思う。

## 実践 2

1 主題名 過ちを許す 内容項目 2 - (4) (第6学年・2学期)

資料名 「銀のしょく台」東京書籍

### 2 資料及び本時について

主人公であるジャン・バルジャンは、19年の刑務所での服役を終え出所してきた。長い道を歩き続け空腹だったジャンだったが、刑務所から出てきたということで町のどの宿もジャンを泊めることはしなかった。そんな時ミリエル司教は、あたたかくジャンを迎え入れ、食事をもてなしてくれた。

しかし、ジャンは銀の食器を盗み逃げてしまうが、憲兵に捕まり教会に連行される。そのジャンに対し、司教は怒るところか食器はあげたものであると言い、さらに銀のしょく台を持たせた。「罪を憎んで人を憎まず」という言葉どおり、寛容の心が示されている資料である。主人公のジャン・バルジャンは、しょく台を盗むが、司教からあげたものだと言われる。ジャンの行動は、許されることではないが、司教の言動に対してのジャンの様子や司教の思いについて、発問と話し合いを通して、道徳的価値に関わる多様な考え方に気付かせた。

### 3 授業の実際

本時の学習において、ジャンの状況をふまえた司教の冷静な判断は難しいことであるが、どんな時も、広い心で相手のことを思い、人の気持ちやおかれた立場を考えた判断をするために、導入では事前に行ったアンケートを提示して、本時の価値への方向付けを行った。

おなかがすいている人が、あなたのパンを食べてしまいました。あなたならどうしますか。その理由も教えてください。		
許す	15	・はずみでなっちゃったんだろう。・誰にでも間違いはあるから ・おなかがすいているのは、しかたないから。・パンはまた、買えば良いから。
許す	7	・謝ってきたら許す。・注意をしてから許す。・理由があれば許す。
怒る	9	・同じ物を買ってきてもらう。・大人になったら万引きをしてしまうかもしれないから。 ・人の物を勝手に食べたから。・そのパンの代金の2倍のお金をもらう。

発問 ジャンはなぜ、銀の食器を盗んだのかな。

この発問により、お世話になった人の物も盗んでしまうほど、ジャンの心が荒んでいるのはどうしてかを捉え、中心に発問へとつなげたいと考えた。自分の考えを書き、グループでの話し合いを行った。

自分の考えを書くために、補助発問では、「ジャンは体中が震えていた」「まごまごした様子で、思わず手を伸ばして」「ジャンは今にも気を失いそうな様子をして、そこに立ち尽くしていた」などの言葉に着目した。また、動作を交えながら言葉の説明をしたことにより、考えを書くことができた。

その後、グループになり、考えを発表し合い、お互いの考えを尊重しながら、交流するように話した。

※ 話し合いをするために、「なるほど」「どうしてそう思うの」「そうかなあ、でも、私はこう思う」などの、声をかけ合うように伝える。

- S 1 : お金にかえて、幸せなくらしたかったから。  
S 2 : でも、これから生きていくためのお金がないから、売って何か買うためじゃない。  
S 3 : そうそう。これからの生活に必要なお金にするためだと思う。  
S 4 : 食器を売って、お金にして、その後の生活をらくにしたかったから。  
S 1 : でも、おなかがすいた時に何か食べられるようにするためかなあ。  
S 2 : ジャンは、貧しくて、お金もなくて、かわいそうだね。



図5 児童の考えの板書①

中心発問 「銀の食器といっしょに、銀のしょく台も差し上げたのに。どうして持っていらっしゃらなかったのかな」という言葉には、司教のどんな思いが込められていたでしょう。

ジャンのした行為は、決して許されるべきことではないが、司教の思いを考えることで、価値にせまりたいと考えた。児童のワークシートは三通りに分けることができた。

広い心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元々は、貧しい人の物だったから、それを貧しい人に返そうという思い。</li> <li>・貧しい人から物を取り上げてしまうのは、いくら自分の物だったとしてもかわいそうだ。</li> <li>・これは、とったのではなく、あげたものだ。</li> </ul>
相手の立場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食器を売って貧しい生活を抜けだして幸せな生活を送って欲しい。</li> <li>・生きていくためのお金がないのだから、こういうことにして、生きられるようにしよう。</li> <li>・安心して受け取ってもらえると嬉しい。そして、これから幸せな生活を送って欲しい。</li> <li>・食器を売って貧しい生活から抜けだして欲しい。</li> </ul>
願い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう二度とあやまちをすることがないように。</li> <li>・もうこの人に罪をおかしてほしくないから、ここは許してあげよう。</li> <li>・ジャンに二度と盗んで欲しくない。</li> <li>・この銀の食器をもらってください。そのかわりに、もう盗んだり悪いことをしたりしないで下さい。</li> <li>・言わないでおくから、もうこんなことはしないで欲しい。</li> </ul>

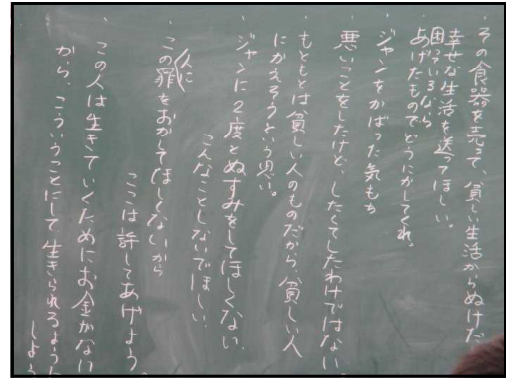
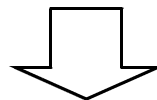


図6 児童の考えの板書②

終末での振り返りでは、今日の授業と自分を重ねながら、感想を書かせた。

- ・一回失敗をしてしまったら、もう同じ失敗は繰り返さないようにしようと思いました。失敗をして学ぶ事もたくさんあるのだと思いました。
- ・ジャンは銀の食器を盗んだけれども、司教は貧しい人たちの物だといって、食器をあげたので心の広い人だなあとと思った。

体験活動との関わり



なかよしタイム

本校のなかよしタイムは、1・3・6年生の集団で行われる。高学年の児童が班に分けられ、班長を中心に計画、準備を行い、責任感やリーダー性を育てるものである。毎回、遊びの計画を立てるが、1学期の頃は、内容を決める程度の話合いであった。2学期になると、ピブスを付けておにごっこをしたり、6年生がおにを率先して引き受けたりして、下級生が楽しめるような工夫が見られるようになった。相手に合わせた行動や広い心を持って接することができるようになった児童が増えた。



図7 なかよしタイム 活動の様子

#### 4 考察

- 友達の考えを聞くことで、様々な意見を聞く力がつき、自分のこととして感想を書く児童が見られるようになった。また、自分の考えを発表することで、グループやクラス全体で共有することができた。
- なかよしタイムで、下級生の立場になって考え行動できる児童が増えた。
- グループでの話合いの場面では、相手にとってどうなのかという視点を持たせるなど、活動が活発になるような発問を工夫していく必要がある。
- 相手のことを思ったその場に応じた判断力や価値理解をより深めるために、発問の構成を工夫していく必要がある。